

東京税理士会武蔵野支部 支部長賞

税と「あたりまえ」

三鷹中央学園三鷹市立第四中学校

三年 山中 七海

税金は必要ない。私は税を知ってから 10 数年間そう考えていた。母子家庭で育った私は母の給料から税金がひかれていると知った時「どうして人のお金を取るのだろうか」と疑問を抱いていた。ひかれたお金があれば好きなお菓子を買ったり家族で旅行に行ったりする事もできたのではないかと思っていた。しかし租税教室を通して私の考えは一変した。

授業ではグループ活動を通して税金がどのように使われているのかを知った。普遍的な日常に税に関する物が多く存在していた事に気付かされ、とても驚いた。例を挙げると歯磨きやお風呂、トイレなどに利用される水や、勉強する時に必要な教科書や実験器具だ。他にも数えだしたらキリがないほど税はたくさんある。

さらに私が最も感銘を受けたのは医療についての税だ。私は産まれた頃からの疾患で入院や手術をした事がある。母に聞いた所、私の入院にかかったお金は 2 週間で約 10 万円だという。治療に必要な薬などの医療品やリハビリを含む医療関係者からの支援もあった。さらに一日三食の食事も用意された。私はこの手術で言葉を発しやすくなり意思疎通が楽しくなった。いわば人生が変わったと言っても過言ではない。そのお礼として支払うには 10 万円は安すぎる。普通ならありえないがこの背景にあるのが税だった。その事実を私は租税教室をきっかけに知る事ができた。

もし税金制度がこの国に存在せず、私たちが様々な支援を受ける事ができなかったらどうなっていたのだろう。母はお金を稼ぐために昼夜問わず働き、疲弊し切っていただろうし私と姉は母の愛を知らずに育っていたはずだ。

私たちが日常の中で税と関わる事は少ない。だからどうしても「とられている」という悪いイメージがあるだろう。しかし税金は私たちの日常を充実した物にしてくれる。実際に私は不自由なく暮らしている。さらに将来の夢に向けて努力する事もできている。「もしそれすらもできなかったら。」私の目に映る普遍的な日常は色褪せていただろう。

私たちが納めている税は「あたりまえ」の豊かな日常へとつながる。「あたりまえ」は「特別」であり、それを支えているのは税だ。それに気づくのは「あたりまえ」を支える税の特質上むずかしいと思う。しかし税が与えてくれる特別な毎日の価値に気づかないまま国民の三大義務だからと言って「仕方なく払う」のではなく「私たちの豊かな毎日を支えている」と誇りに思っている。